

(6) その他

・資格取得の取組

① GTECの取組について

1) 結果

本年度は第1学年は12月、第2学年は7月と12月の2回にわたってGTEC（アセスメント版）を実施した。昨年度は第1学年はBasic、第2学年はAdvancedを受験したが、本年度は両学年共にAdvancedを採用した。12月に受験した結果は3月中旬に返却予定であるため、第2学年の7月受験分の結果についてスコアとCEFR-Jのレベルを示す。

【第2学年】昨年度からこれまで受験した計4回分を掲載。（ ）内はCEFR-Jレベルを示す

	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
1年 7月	195.6(A2.2)	174.7(A2.1)	228.9(A2.2)	実施せず	-
1年12月	202.2(A2.2)	177.1(A2.1)	235.4(A2.2)	204.4(A2.1)	-
2年 7月	194.7(A2.2)	202.1(A2.2)	234.5(A2.2)	220.7(A2.2)	853.6(A2.2)

実施したそれぞれの技能測定でCEFRのB1の基準以上に一致する生徒の人数を以下に示す。

	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
1年 7月	75	48	22	-	15
1年12月	121	48	171	0	19
2年 7月	67	102	168	12	37

2) 結果の考察と来年度の課題

第1学年では、グローバル英語の時間を利用してディスカッションやスピーチを行うことによって、スピーキング力の養成に力を入れている。コミュニケーション英語と英語表現においても、4技能をバランス良く活用できる活動内容を組み立てている。GTECスコアで普段の授業の活動内容を見直し、生徒達が各自の英語力を知り、今後の学習目標を立てる励みになることを期待する。

第2学年でも、普段の授業においてペア活動やディベート等を取り入れながら、4技能のバランスを意識した活動内容を取り入れている。留学から帰国した生徒たちやアドバンスドコースの生徒たちが、お互いに良い刺激を与え合いながら、学年の大きな牽引力となっている。上位層には実用技能英語検定で成果を発揮している生徒も含まれており、積極的な学習姿勢が見られる。Readingのスコアは今年度7月に若干降下している。これは問題のタイプがBasicからAdvancedへと切り替わったため、問題の難化に十分対応できなかったためだと考えられるが、まとまった量の英文に対して、文章全体の趣旨やパラグラフごとの要点について英文の理解する力が比較的弱いことが判明した。普段のリーディング活動の内容を見直し、リーディングの絶対量を増やすことを考えていく必要がある。Listeningについては、2学年になってから顕著な伸びが見られる。CEFR基準でB1以上の実力を持つ生徒も昨年12月の回に比べ、倍増している。授業における様々な言語活動の中で、生徒たちが主体的に情報を取得できる能力を培ってきたことが実感できる。Writingでは、平均スコアにそれほど伸長は見られないが、CEFRのB1.2レベルの生徒数は昨年12月と比べ、13人から31人に増えている。観点別評価に着目すると、意見展開問題において90%以上の生徒が自分の意見とそれに対する理由を書けている点が評価できる。入学以来、かなりの量の英語を書く活動を継続し、主題と理由、その根拠を書くことを徹底してきた成果であると考えられる。一方で語彙、文法、構成・展開では大半の生徒が5割から6割程度の得点率であることから、今後も文法的正確さ、使いこなせる語彙の増加に加え、多角的な視点から自分の考えを説明し、関連性を持たせて主張につなげる文章を書く力をつ

ける努力を継続していきたい。Speaking については、昨年より平均スコアも上がり、上位層にも伸びが見られる。99%の生徒が自分の意見を述べていることができるものの、それに対する理由を伝えられる生徒は70%程度にとどまった。また図表を見ながら質問に回答する力も弱いことから、複数の情報を統合して、整理し、表現する力をつけていくという課題も明らかになった。普段の授業ではペアで話す活動を必ず取り入れており、相手に伝わるように話す姿勢がかなり身につけてきたと感じている。生徒達が成長を実感しながら、自ら課題を見つけ、克服していく力を身につけられるように導いていきたい。

・留学生受け入れ・派遣のための取組

1. 長期留学生・短期留学生の受け入れについて

2019-20 年度国際ロータリー青少年交換学生として、アメリカ合衆国マサチューセッツ州出身の1名の女子生徒を2学期から留学生として受け入れた。学年は1年生に所属し、来年7月までの受け入れとなる。授業に熱心に取り組むだけでなく、部活動にもほぼ毎日参加し、交流の輪を広げている。また、1月に本校へ中国からの学校訪問があった際には、交流会の司会を担当し、レクリエーションを企画するなど行事等にも積極的に参加している。2月に行われた課題研究発表会では、アメリカと日本の違いについて、日本語で発表を行った。



2. 今年度留学に派遣した生徒について

2019-20 年度国際ロータリー青少年交換学生として、8月から1年間の予定で2年生の女子生徒がアメリカ合衆国メリーランド州の高校に留学した。

次に、「AIG 高校生外交官渡米プログラム」を利用して、2年生の女子生徒が7月に渡米した。本プログラムでは、夏期休業中の約3週間アメリカを訪問し、ホームステイを体験したり、現地の高校生とペアを組んでプレゼンテーションやディスカッションをしたりしながら、多角的な視点で異なる文化や考え方について学ぶ。また、2018-19 年度国際ロータリー青少年交換学生として渡米した2名の女子生徒が8月に帰国し、「AIG 高校生外交官渡米プログラム」に参加した女子生徒と3人で2学期末に留学報告会を行った。パワーポイントを用いて、現地での経験や、留学を通して自らが得たことについて話し、発表を聞いていた他の生徒たちも興味深そうに耳を傾けていた。

次に、今年度初めて本校から「フィリピン語学留学」として3人の女子生徒をフィリピンへ派遣した。このプログラムは、村本建設（株）の協賛を受けて実現したものであり、第2学年を対象に募集を行い、作文・面接による選考を経て3人の派遣生徒を選抜した。派遣生徒には事前研修を実施し、また2月に行われた課題研究発表会では、事後報告会を行った。

最後に、「かめのり中高生アンバサダープログラム」を利用して、1年生の男子生徒が1月から2月にかけて1週間フィリピンに留学した。本プログラムは、フィリピンの文化や社会などを知ることを通して文化の異同を理解し、現地の高校生と協働して課題に取り組みながら様々な人と



コミュニケーションをとることを目的としている。帰国後、パワーポイントを用いて学年に向けて報告会を行った。

### 3. 来年度の留学予定について

現在「第6期トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム高校生コース」に1名応募している。「トビタテ！留学 JAPAN」は、文部科学省が官民協働のもと取り組んでいる留学促進キャンペーンである。応募生徒は、自分自身で留学したい国を選んで留学計画書を作成し、その計画書に基づいて活動していく。2月現在、選考結果を待つ状況である。

### 4. 本年度の成果と課題について

今年度は、10月に交流校であるオーストラリアのバイロンベイ・ハイスクールから短期の学校訪問があり、1月には中国の済寧孔子国際学校からの学校訪問があった。また本校はISAが主催するエンパワーメントプログラムの会場校であったことから、生徒たちは海外の学生や生徒を校内で見かけたり、一緒にプログラムに参加したりする機会に恵まれ、身近で国際交流を体験することができた。また、今年度から第2学年は海外研修で台湾を訪れた。現地の人々との交流を通じて、多くの生徒が英語でコミュニケーションをとることの楽しさや異文化を理解することの大切さを見出したように思われる。こうした経験が良い刺激となり、英語学習への動機付けや、海外へと視野を広げ、留学を意識する契機となることによって、留学に関する問い合わせもますます増えている。

留学経験者は帰国後も様々な場面で活躍している。英語の授業では、彼らが中心的な役割を果たしながらペアワークや発表に積極的に取り組み、他の生徒の良い見本となっている。彼らの多くがアドバンスコースに応募し、さらに学びを深めている。彼らはまた、留学に関心のある生徒に対し、留学担当の教員と連携して個別に相談に応じたり、全体に向けて留学報告会を行ったりなど、継続的に留学を希望する生徒たちのサポート活動に携わってくれている。

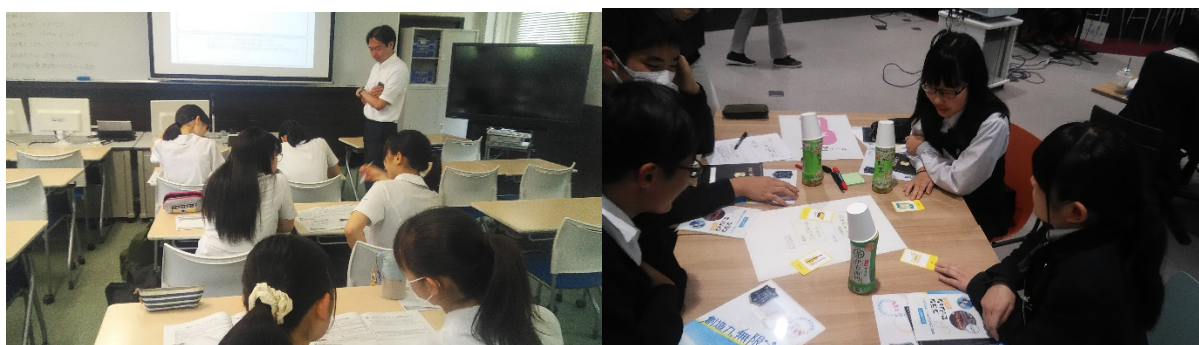
留学希望者が増える中で最大の悩みとなっているのが、留学にかかる費用と選考の準備である。留学には高額な費用がかかるため、多くの場合補助金や奨学金の制度があるものに応募が偏り、倍率も上がるため、留学の実現自体が困難になっている。また、そういった制度の留学では、応募の要件として作文などが求められ、準備にかなりの時間を要する。実際、「AIG 高校生外交官渡米プログラム」や「トビタテ！留学 JAPAN」に関心を持って話を聞きに来る生徒が多くいたが、最終的に応募したのはほんのわずかにとどまった。留学の応募案内が届き次第、生徒に速やかに告知することはもちろんであるが、毎年決まって応募があるものに関しては、年度の最初にホームルーム等で周知を行い、生徒たちが余裕をもって留学について考えたり、準備を行ったりできる体制をつくっていきたいと考える。

## ・「高校生ビジネスプラン・グランプリ」への参加

### <概要>

日本政策金融公庫が主催する、「第7回 創造力、無限大∞ 高校生ビジネスプラン・グランプリ」に、アドバンストコースを中心とした有志の生徒6名が3つのチームに分かれ、それぞれがビジネスプランを作成して応募した。プランの作成にあたっては、日本政策金融公庫から派遣された講師による指導を2回受けた（7月17日、8月26日）。9月25日の締切後に書類審査が行われた結果、全国3,808件（409校）から本校より1チームがベスト100に選出された。ベスト100に選出されたチーム（生徒1名）は12月26日に関西大学梅田キャンパスにて行われた南近畿地区プラン発表会&表彰式に参加し、プレゼンテーション発表を行った。残りの2チームのうち1チームについては、令和2年1月26日に関西大学梅田キャンパスにて行われたプランセッションに参加し、プレゼンテーションや交流を行った。

本コンテストは、準備・企画・応募からその後まで、高校生にとって探究的な学びの機会となることを目指し、参加者に費用負担をさせることなく実施され、毎年有益な機会となっている。



**ベスト 100**

奈良県立畷傍高等学校  
**中村 結**

一生使える！奈良県産マルチ学習デスク  
「Bare Lige（バーリー）」

「家具を大切にしてほしい」という想いから、一生使用でき、誰もが使いやすく親しみやすい家具を提案する。用途に合わせて、学習机が収納棚へと変身！プランには、奈良県の林業活性化への願いも込められている。

左上 講師の指導（学校内で開催）

右上 プランセッション

左 ベスト100入賞作品

## ・「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」への参加

### <概要>

（社）青年海外協力協会（JICA）の主催するエッセイコンテスト。国語科の協力を得て、毎年夏に第1学年から応募を募り、今年度は360名中324名が参加した。第58回となる今回、全国では高校生の部に28,141点の応募があり、うち本校からは「国内機関長賞（おおむね各都道府県から1名程度）」を1名、それに次ぐ佳作に1名が入賞したほか、大量の応募があったことで学校としても表彰された（学校賞）。

本コンテストには、1年生の関心・意欲の喚起を目的として、4年前から参加を始め、2年目から毎年入賞者を輩出している。参加の費用も小さくなく、また、国内機関長賞以上の賞については、毎年地区表彰式に招待されることもあり、関心が高い。過去の入賞者（2017年度、2018年度）は、いずれも2年生になって本校事業の中核であるアドバンストコースに応募し採択されている。このことから、身近な地域や世界が直面する課題について自らの言葉で語るという同コンテストは、本校の取り組む事業との親和性が高いことが伺われ、今後とも引き続き取り組んでいきたいと考えている。

・エンパワーメントプログラムの取組

「エンパワーメントプログラム」(Empowerment Program)は、カリフォルニア大学デービス校国際教育センターの藤田齊之氏がカリキュラムを作成し、ISA社が独自に開発したプログラムである。このプログラムでは、外国人大学生1人と日本の中高生5～6人が小グループでのディスカッションやプロジェクトへの取り組みを協働して行う。今年度も冬期休業中の12月24日から28日までの5日間、本校を会場に開催し、28名が参加した。

今年度のプログラムの内容として、第1日目はお互いの自己紹介から始まり、このプログラムで自分が成し遂げたいゴールについて話した。また、グループリーダーによるモデルプレゼンテーションを聞き、英語プレゼンテーションの基礎を学んだ。第2日目～第5日目には、「Positive Thinkingについて」、「My identityについて」、「Leadershipについて」、「自分の将来の目標について」、「日本と海外の大学システムについて」というテーマのもと、スモールグループディスカッションを行った。また、「奈良県の魅力を世界に発信しよう」、「世界や地域社会にいかに関与できるか考えよう」、「Take Action!問題解決に向けて今私たちにできること」という3つのプロジェクトにも取り組んだ。第5日目の最終日には、4日間で学んだことを生かして、生徒一人一人によるプレゼンテーションを行った。

最初は緊張していた参加生徒も、グループディスカッションを行ったりプレゼンテーションの指導を受けたりすることによって、英語で堂々と討議するようになった。最終日の個人プレゼンテーションでは、多くの生徒が原稿を見ずに、ジェスチャーを用いながら見事なスピーチを行った。ただ自分の意見や主張を発表するだけでなく、聞き手にきちんと伝えたいという強い想いの表れであると考えられる。

このプログラムに参加した生徒の主な感想は、以下の通りである。

- ・人前で話すことに抵抗がなくなった。
- ・自信を持つことが大切だと分かった。伝えようという気持ちがあれば、伝わるということが分かった。
- ・積極的に発言するように意識が変わった。
- ・5日間の中で日が経っていくほど英語を話すのが楽しくなっていった。
- ・英語を話すことが少し好きになった。
- ・様々な活動でポジティブな考えを得ることができた。

また、今後の抱負や希望に関しては、主に以下のように述べている。

- ・初めは続けるのが大変だなと思っていたが、次第に楽しくなり、5日間では物足りなかった。また留学生と交流したい。
- ・特にプレゼン能力とコミュニケーション能力が向上したと思う。また将来、海外に行くときにこの経験を生かしたい。

このプログラムに参加することによって、ほとんどの生徒は英語で自分の考えや思いを述べることに自信をもつことができたとともに、英語学習へのモチベーションを上げることができた。プログラムに参加した生徒の多くは、学校の授業でも積極的に英語を話したり、アドバンストコースや短期留学に応募したりするなど、このプログラムをきっかけにその後も様々なことに挑戦しようとする姿勢が見られる。本校教員も、あらためてディスカッションやプレゼンテーションなどのコミュニケーション活動の価値を再認識し、どのようにして生徒にそれらの能力を身につけさせていくか、教育活動全体を通して考えていきたい。

